

<調査報告・実践報告>

外国語学部生のつまずき傾向の分析 および支援策等に関する報告

中本 陵介¹・桜井 延子²

京都産業大学外国語学部は外国語学部生の退学未然防止に向けた一連の取り組みを行った。まず、(1) 外国語学部生の退学などつまずき傾向や時期について退学者の過去の成績と記録を分析した。結果、外国語学部生は入学目的が明確で語学学習に対する意欲が高く、1年次の成績が良好であった場合は退学に至る確率が低い一方、1年次で低単位者となった場合は留年や退学に至る確率が高く、二極化する傾向があることがわかった。次に、(2) 退学に関する電子記録の分析を行い、退学者を「A 不本意入学型」、「B-1 対人スキルの欠如型」、「B-2 学習習慣の欠如型」に分類し、それぞれのタイプへの対応を検討した。(3) A、B-1 に対しては大学への期待感高揚と友人関係づくりのきっかけを与えることを目的としたスタートアップセミナーを行い、概ね高い満足度が得られた。B-2 に対しては高校時代までに獲得した経験・資質を測る質問紙調査を実施し、低単位者群と成績優秀者群の設問への回答差を調べたところ、先輩学生によるメッセージの満足度、忍耐力や継続力、学習習慣の質問項目の一部に有意差があった。これらの取り組みから、退学未然防止には学部カリキュラムや各学部生の特色、入学までに身に付けた資質を勘案して取り組むことの重要性が示された。

キーワード：外国語学部生、退学、不本意入学、質問紙調査、学習習慣

1. はじめに

近年の多様な学生の入学に伴い、学業不振者に対する支援や退学の未然防止が大学における課題の一つになっている。中央教育審議会大学分科会将来構想部会は、各大学の留年・中退率や授業方法・内容、単位修得状況等の公開義務化を提言する（日本経済新聞 2018）など、高等教育における修学支援や中退防止は多くの高等教育関係者の関心を集めるところである。

1.1. 修学支援に係る先行研究

近年、大学生に対する修学支援の理論が多数、報告されている。例えば、日本高等教育学会第 18 回大会では、研究発表のテーマの一つとして「不適応学生」が挙げられ、修学支援の考察、中退者についての統計的分析、親の学歴と学修行動の統計的分析の報告があった（日本高等教育学会第 18 回大会実行委員会 2015）。また、中本・垂門（2015）は、京都産業大学における 194 名の成績不振学生への調査の質的分析を行った。「朝に起きられない」「通学に時間がかかる」「一人暮らし等

で生活リズムがうまくいっていない」といった生活面や、「履修科目に興味を持てない」「勉強方法が分からない」といった学業面での問題に対して解決策を自ら見つけることができず、成績不振に影響を与えていることが推測された。

大学における初年次のつまずきと退学への影響を分析した報告もある。大河内・山中（2016）は、千歳科学技術大学において、退学・休学・留年者を「未進級者」と定め、初年次の Grade Point Average（GPA）を分析した。結果、未進級者の約 80% が GPA1.5 以下であったことがわかり、初年次のつまずきが退学に影響を及ぼしていることを報告している。伊藤ほか（2014）は、名古屋工業大学において学生の修学データを用い、退学や留年に至りやすい要注意学生の傾向について分析した。結果、初年次 GPA が 1.0 であったこと、中間の成績が少なく良いか悪いか極端であること、時間が経つにつれて出席率が低下することが示された。要注意学生の抽出には、複数の観点から学生を評価することの有効性が示された。

¹ 京都産業大学 教学センター 外国語学部事務室、² 京都産業大学 外国語学部

1.2. 本研究の目的

前項の各大学での先行研究を整理し、新たな修学支援モデルを提案する報告もあり（高岡ほか 2017）、修学支援の研究報告は珍しいものではなくなっている。しかし、各学部の特徴を踏まえた報告、特に支援現場からの事例や分析報告はまだ少ない。そこで筆者は、語学を専門とする本学外国語学部生の過去の成績・退学データを分析し、学部の特色に沿った修学支援策の検討を行うこととした。

本研究の最終的な目的は「各学部学生の修学状況、退学・留年傾向などをデータから明らかにし、各学部の特色に併せた効果的な修学支援策を提示すること」にある。本稿では、語学を専門とする学生の特性、つまずきの傾向やその理由を明らかにすることを主目的としつつ、さらに実施した「修学支援策」および「質問紙調査への回答を用いて行った検定結果」から示唆される今後の支援策の展開についても述べたい。

なお、本稿執筆にあたり、中本が執筆とデータ処理・分析を担当し、桜井が構成・校正・検定を担当した。

2. 外国語学部生の特性とつまずき傾向

2.1. 外国語学部のカリキュラムの特徴

京都産業大学外国語学部は、4学科12専攻体制となっており（2018年4月現在）、入学定員500名（各年次）規模の学部となっている。専攻言語に加え、英語を副専攻語として設定し¹⁾、原則すべての語学クラスを少人数クラスで実施するなど、きめ細やかな語学教育を実施している²⁾。また、成績不振や退学などのつまずき防止のため、教職員との定期的な面談を行っており、修学支援体制を整備している³⁾。なお、本学では1学期間または1年間に履修登録できる単位の上限を設けるキャップ制度を設定しており、外国語学部では1学期間で24単位、1年間で48単位を履修上限としている。

2.2. 外国語学部生の特性

当然とも言えるが、入学者の言語学習への意欲は高い。2017年度4月の入学生へ行った「2017年度入学者調査」によると、475件の回答の内、403名（85%）が「語学（英語・その他言語を含む）が好きだ」と回答している。また、留学を意識している学生も多く、同368名（77%）が短期の留学を希望し、308名（64%）が半年以上の長期留学を希望しているなど、明確な学習に対する

意識を持って外国語学部を選択し、入学していることが窺える。2014年度入学生を例に留学実績を挙げると、1年次終了時に約7割の学生が短期海外実習に参加し、その後2年次から3年次にかけて約3割の学生が半年から1年間の長期留学を実現している。

2.3. 外国語学部生のつまずきの傾向と時期

それでは、外国語学部生のつまずきの傾向とはどのようなものか。ここでは、成績を単位修得率と読み替え、外国語学部生の単位修得の傾向を探ると共に、単位修得状況がその後の進路（退学や留年など）にどの程度影響を及ぼすのかを概観したい。

2.3.1. 退学の規模

まず始めに、外国語学部生の「退学・除籍」（以後、「退学」とまとめて呼称する）の規模、離籍時期、そして退学に至った状況の把握から行った。過去のデータの抽出に当たり、2010年度入学の外国語学部生の修学データを利用した。データの集計は、2016年10月から2017年2月の間に行った。2016年10月分析時点の2010年度入学生（507名）の学籍状況は、卒業者397名、在学者48名、休学者10名、退学者44名であった。

2.3.2. 退学と単位修得率の関係

(1) 退学者の修得単位数

次に、退学と単位修得状況の関係を見るため、退学に至った者の各年次終了時点の修得単位数の平均値および中央値を求めた⁴⁾。結果、1年次終了時平均値21.0単位（中央値18.5単位）、2年次11.8単位（12.5単位）、3年次6.5単位（8.4単位）であった。一方、退学者を除いた学部全体の修得単位数は、1年次39.8単位（42.0単位）、2年次38.4単位（42.0単位）、3年次35.4単位（34.0単位）であり、修得単位数には大きな差があった。卒業するには各年平均31単位を履修する必要があるが、退学に至った学生はその基準に届かず、初年次からつまずいていることがわかる。

(2) 初年次のつまずきが退学に与える影響

それでは、初年次につまずいたとしても、その後、挽回することはできないのであろうか。1年間の登録上限は48単位であるため、初期段階でつまずいたとしても、計算上ではその後挽回することは十分に可能である。今回、(ア)1年次終了時点で9単位以下の学生（ $n=21$ ）、(イ)1年次終了時点で10-19単位以下の学生（ $n=25$ ）を調査した⁵⁾。結果を表1に示す。(ア)の内、63.2%（ $n=13$ ）、また(イ)の内、44.0%（ $n=11$ ）の学生が退学に至っている。さらに(ア)の内、退学し

なかった学生の留年率を見ると100%であり、(イ)の内、退学しなかった学生も85.7%が留年していた。計算上では挽回可能であるが、実際には、初年次につまずくと、高い確率で留年や退学となることがわかった。

上記の退学率を別の角度から見てみたい。2010年度外国語学部入学者507名の内、82.4% ($n=418$) の学生は、年間31単位以上(ウ)という良好な単位数を修得している。この31単位は、卒業に必要な単位数の一定の水準ではあるが、実際には、そのボーダーの32単位や30単位にプロットされる学生数は全体の数%程度であり、31単位を大幅に上回るか、30単位を大幅に下回るかの二極化していることがわかった。また、成績良好者の退学率は2.6% (通算) であり、清水 (2013) が調査した全国の私立大学の2008年度入学生の4年間における退学率は11.0%、国公立を足し合わせた退学率でも9.4%であった。単純比較はできないが、成績良好者の退学率は、全国の平均値よりもかなり低いことがわかる。

以上のことから、外国語学部生の特性として、入学目的が明確で語学学習に対する意欲が高い学生が多く、80%以上の学生が良好な単位数を修得し、その後の退学率も低い一方で、初年次につまずいた場合は留年や退学に至る確率が高くなるなど、二極化する傾向があることがわかった。

表 1. 1年次終了時修得単位数別の退学率・留年率

区分	1年次終了時の単位数	対象者数	退学率		留年率 (退学者を除く)	
(ア)	0-9 単位	21	63.2%	($n=13$)	100.0%	($n=8$)
(イ)	10-19 単位	25	44.0%	($n=11$)	85.7%	($n=12$)
(ウ)	31 単位以上	418	2.6%	($n=11$)	2.7%	($n=11$)

3. 退学者の離籍理由

本章では、退学者44名の入学時の大学への志望度・不安度、また、離籍時の退学理由を分析し、成績不振に至る理由を分析する。

3.1. 退学者の入学時調査の結果

「2010年度入学時調査」から、退学者44名の2010年4月入学時の大学への志望度と授業への不安度を確認した。大学への志望度は、第一志望52.3% ($n=23$)、第二志望36.4% ($n=16$)、第三志望11.4% ($n=5$) であり、第一志望と第二志望以下がほぼ同数であった。学部全体 ($n=486$) では、第一志望45.0%、第二志望34.1%、第三志望20.9%であり、退学者の第一志望の割合は、学部全体と

比べやや高く、入学者の志望度はここでは影響がないように見える。次に、大学入学にあたって感じる不安を4件法(「1. 不安がない」から「4. 不安がある」)で尋ねた。「友達ができるか」の不安を問う設問に対し、「3. やや不安がある」または「4. 不安がある」と答えたのが7名、「1. 不安がない」または「2. あまり不安がない」と答えたのが37名であった。さらに、同「授業への不安」を尋ねた設問でも、「3. やや不安がある」または「4. 不安がある」の回答は7名、「1. 不安がない」または「2. あまり不安がない」は37名であった。

以上のことから、退学者44名は、大学への志望度は半数が第二志望以下であったものの、授業や友人関係に関する不安は入学直後には抱えていなかったことが窺える。

3.2. 退学理由の分析

次に、退学者の外国語学部事務室への相談履歴を蓄積する電子記録から、質的分析を行うこととした。電子記録は、休学や退学の情報だけでなく、成績不振学生への面談記録、休学退学などの事務手続など主に事務職員によって聞き取られた様々な情報が蓄積されている。今回は、まず電子記録に多く挙がっていた頻出語を抽出することで、おおよそどのような記録が電子記録に残されているかを把握した後に、記録されている面談情報などの原文から、退学に多く挙げられる理由を明らかにすることを試みた。語彙の抽出には、Kh coder (バージョン3.0) を使用した。

3.2.1. 退学に至る経緯

(1) 退学に係る頻出語の抽出

総抽出語数は40777語、文章は2049文であった。「本人」(449)、「退学」(349)、「単位」(277) (括弧は抽出語数を示す) など事務手続きに関わる面談時の確認事項などの語彙が頻出語の上位に出現していた。次に頻出度が高かった語彙として、「授業」(131)、「提出」(130)、「出席」(123)、「母親」(104)、「大学」(103)、「履修」(98)、「面談」(97) が抽出された。成績不振に陥った際には、本人と教職員との面談を行うなどの修学支援を行っているが、面談において、授業の出席や課題の提出率、低単位修得率に陥った背景について母親を含めて話し合いを持った記録が集計されていると想像できる。さらに、「友人」(34)、「意欲」(24)、「勉強」(20) などの修学や大学生活に関する語彙、さらに抽出語としては少ないが「無理」(9)、「困難」(8)、「嫌」(6)、「不安」(6) など、将来に対して不安な思いがあるが、うまく解決できていない状況が推察された。

(2) 単位修得に影響を与える一要因

頻出語から推察できることとして、まず、何らかの困難や理由があり授業に出席しなくなった、その後、低単位となり、保証人を交えた面談を重ねるものの、最終的に退学に至ったことが窺える。なお、単位に直接影響を及ぼす要因の一つに、出席率が考えられる。実際に、出席率と成績の関連性を調べる研究は複数あり、例えば、垂門（2015）は、京都産業大学の1年次2578名分のデータを分析した。GPAを目的変数とし、大学入学直後に測定した「社会的強み」、「高校時代の習慣」、および「大学入学後の授業への出席率」を説明変数とした重回帰分析を行い、出席率がGPAの強い予測要因となっていることを報告している。主に語学学習やコミュニケーションの授業で構成される外国語学部においては、特に出席率が非常に重要であると考えられる。

以上のことから、友人関係や修学意欲、あるいは勉強に何らかの課題があり、授業に行き辛くなるなどの問題を抱えた学生が、解決できないまま低出席率、成績不振（低単位修得）に陥るなど、退学に至るまでの経緯がわかった。

3.2.2. 退学理由の分類

次に電子記録の原文を確認した。「もともと大学自体に来たくなかった（親が言う、友達が行くから）」、「修学意欲がなかった」、「語学が好きでない」、「不本意入学したため、転学したい」「授業への気持ちが向いた時に行こうと思うが、なかなか気持ちが向かない」など、内発的な学習意欲がかけられているコメントが散見された。これらの回答は、不本意の入学であり、そもそも本学に入学する前段階におけるミスマッチであったとも言える。本学の志望順位は高くとも、合格した学部や専攻語が希望するものではなかった、あるいは語学は地道な学習を必要とすることを想像していなかった可能性も考えられる。ここでは、今後の区別を容易にするため、これら3割の退学者を「A 不本意入学型」と呼ぶこととする。

4割の退学者からは、元々意志を強く持って入学したが、「大学の環境になじめなかった」、「授業についていけず嫌になった」といった回答が浮かび上がった。これらの回答は、大学に入った際の学習やそれを取り巻く環境への適応がスムーズにいかなかった事例であると推測できる。さらに、「大学への環境に馴染めなかった」理由としては、「高校時代からコミュニケーションが苦手であった」という対人スキルに問題があると考えられる回答が多くを占めた。また、授業に関しては「（高校時代よりも）予習復習が多すぎてついていけな

い」、「朝に起きられない」などといった課題が見られた。外国語学部は高校時代に類似した少人数クラスでの授業を実施しており、平日の1, 2限に語学科目が入る。例えば予習や復習も毎日少なくとも2から3時間程度は費やさなければならない。そのような環境下では、規則正しい生活と共に学習習慣を身に付けていなければ授業について行くことが難しいのかもしれない。上記の退学者を「B 大学非適応型」と定める。さらに、問題を「B-1 対人スキルの欠如型」、「B-2 学習習慣の欠如型」の2つに分類することで、問題を明確にし、支援策を検討しやすいようにした。

その他、「就職するため」、「病気のため」等の問題が挙げられていたが、その詳しい事情を読み取ることができず、分類できない回答が3割を占めた。

3.3. 退学理由の考察と支援策

退学理由の分析結果から、「A 不本意入学型」「B-1 対人スキルの欠如型」「B-2 学習習慣の欠如型」の3つの退学タイプに分類した。この節では、それぞれのタイプを考察し、そこから考えられる対策について述べる。

3.3.1. 退学理由の考察

(1) A 不本意入学型

「A 不本意入学型」の特徴について、神林（2014）は東北学院大学での調査結果から、「友人関係の構築をあまり重視せず、自身の進路に関心が高い」「勉学面での不安は小さいが経済面・大学生活の適応・進路達成に不安を抱えている」（p.23）と推察している。またその対応策として、樋口（2013）は、人間関係を活かした学びの促進と共同の実感、対話を交えた学びなおし、学び・協力しあえる友人づくりと共同の実感が重要であるとし、退学未然防止に向けた支援策を示している。本学の外国語学部のカリキュラムは、コミュニケーションが必要となる語学科目を主体として構成されており、「人間関係を活かした学び」を促進しやすい環境にある。そのような学びの環境を活かした支援策を成績不振となる前の入学時に行うことで、不本意学生を意欲的な学習者に変えられる可能性があるのではないかと考えた。

(2) B-1 対人スキルの欠如型

外国語学部の少人数クラス授業が前述の「人間関係を活かした学び」を促進しやすい一方で、少人数クラスであるがゆえにクラス内で人間関係がこじれてしまうことも考えられる。実際、積極的なコミュニケーションが取れない場合、クラスで孤立し当該の語学科目だけでなく、他の講義科目

なども休んでしまうといった事例が「B-1 対人スキルの欠如型」に見られた。

対人スキルは、入学までに培った資質が大いに影響していると考えられる。溝上ほか（2015）および溝上（2018）によって行われた10年トランジション調査（高校2年次から大学1年次にかけての追跡調査）によると、「コミュニケーション・リーダーシップ力」は、高校までの資質・能力が大学での同能力に影響を及ぼしており、変わりにくい次元にあるとされている。つまり、対人スキルが乏しい場合は、高校時から大学時にかけて何らかの外部からの支援やきっかけがない限り、改善しない可能性がある。当該スキルが欠如している学生に対して、理想的には心理面でのサポートが必要である。しかし、ソーシャル・スキル・トレーニングなどの支援を要支援者全員に実施するといったことは、現実的には不可能であり、効果的な支援策は現段階では見つかっていない。現状で可能な支援策として、入学時の大学生活への適応（特に、友人関係の構築）をサポートすることで、高校から大学への移行がスムーズにいき、順調に大学に適応できる可能性もあるのではないかと考えた。

(3) B-2 学習習慣の欠如型

小方（2008）によると、「成績」を大学教育の成果（アウトカム）と規定すると、入学前の学力や選抜性（入学審査）の影響が大きいと分析している。また、中学3年次の学力や高校3年次の学習習慣が直接的にも間接的にも、成績（学問的知識）にプラスの影響を及ぼしていることを示唆している。つまり、学習習慣については、対人スキルと同様に、入学前までの資質が大きく影響しており、一朝一夕で身に付けるには相当期間の努力を要するであろう。「B-2 学習習慣の欠如型」退学の予防策としては、入学前に課している事前学習の内容の変更、入学時の学習サポートワークショップの実施が考えられる。しかし、これらの実現には、高校時代までに獲得した学習に関する要素を測り、どのような学習習慣が単位修得率と関連があるか調べる必要があると考えた。

3.3.2. タイプ別の支援策

考察の結果を踏まえ、分類した3つの退学タイプに対して支援策を検討した。まず、「A 不本意入学型」および「B-1 対人スキルの欠如型」への支援策として、大学への期待感昂揚や友人づくりのきっかけづくりのためスタートアップセミナー（以下セミナー）を企画し、実施することとした。実施時期は2章での分析結果から、初年次につまづく前に行うことが相応しいと考え、新入生に対

して行うこととした。セミナーの詳細については、次章の4.1で報告する。

また、「B-2 学習習慣の欠如型」に関しては、即効性のある支援策はないと考え、高校時代までに獲得した学習に関する要素を測る調査を新入生に対して行い、今後の支援策を検討することとした。4.2で「学習に関する調査」の質問項目の設定、分析手順、分析結果等を報告し、4.3で検定結果の考察を行う。

4. 支援策等の詳細

4.1. スタートアップセミナー

セミナーは、2017年3月28日に行い、参加者は475名であった。1) 新入生が大学生活の不安を解消し、入学後、意欲的に大学生活を過ごせるきっかけをつくる、2) グループワークをとおして、大学入学目的の再確認や大学生活を意欲的に過ごすきっかけを与える、3) 友人づくりなどのきっかけを与えることを目標とした。

セミナーは三部に分けて行った。第一部では外国語学部で何が達成できるのか説明し、第二部では先輩学生からメッセージを発信して大学生活の明確なビジョンを形成してもらうことに主眼を置いた。グループワークを取り入れ、新入生同士の友人づくりもサポートした⁶⁾。第三部では、履修説明を行い、自発的な学習・理解が図られるよう、事前学習を課したり、ペアワークなどでそれぞれが理解度を確かめることができるような内容で、大学の学習環境にスムーズに移行できるよう取り組んだ。

セミナーの効果を測るための「スタートアップセミナー満足度調査」（付録1）では、「全体を通してセミナーに参加してよかった。」「【後半】グループワークを通して4年間の目標設定や入学目的の再認識ができた」「京都産業大学の外国語学部で学ぶことが楽しみになった（期待感が昂揚した）」との質問項目に対して、それぞれ、85%、86%、86%とおおよそ好意的な回答であった。効果の測定やさらなる支援策の検討は必要であるとは考えるが、「A 不本意入学型」、「B-1 対人スキルの欠如型」の退学に対する支援の第一歩としては、概ね当初の目的を果たしたと言える。

4.2. 学習に関する調査の実施

「B-2 学習習慣の欠如型」退学者への支援策を検討するために「学習に関する調査」（付録2）を行った。セミナーの一環として「スタートアップセミナー満足度調査」と共に実施した。高校時

代までに身に付けた資質を数値化し、一年後の成績との関連性を分析することで、どのような要因が低単位修得率や退学に繋がるのかを調査することを目的とした。

4.2.1. 質問項目の内容

調査票は 24 項目から構成された。この 24 項目は下記の 3 分野に分類される。

- (1) 高校時代までに獲得した忍耐力や困難を乗り越える力、継続力
- (2) 高校時代までに獲得した学習習慣
- (3) その他

(1) は 7 項目 (Q17-Q23) から構成される。語学学習には、特に初学の言語においては、着実な積み重ねが極めて重要である。着実な積み重ねには困難があったとしても辛抱強くやり遂げる力や忍耐力、長期に渡り努力を続ける継続力が必要だと考えられる。設問の作成に当たっては、Duckworth ほか (2007) の提唱するやり抜く力を測定する「Grit scale」および、西川ほか (2015) が作成した日本語版 Grit-S 尺度の項目を参考にした。Duckworth ほか (2007) は長期的な取り組みを必要とする目標達成のためには、困難を乗り越えて目標を追求する熱意も必要であると報告し、各分野における成功は、基本的な知能指数 (認識能力) 以外の特性も大きく関わっていると主張している。外国語学部で学ぶにあたっては、基礎学力や知識が当然求められるが、「忍耐力」「困難な状況を乗り越えてやり遂げる力」「継続力」が必要とされているのではないかと推察した。

(2) の 6 項目 (Q24-Q30) は、「B-2 学習習慣の欠如型」退学者が述べていた「予習復習が多すぎてついていけない」といった学習習慣の欠如が、実際にどれほど低単位修得率に影響を及ぼしているかを測るために設定した。

語学に関する学習意欲や大学・専攻語に対する志望順位、留学への希望についての項目 (3) その他 (Q7-Q16) は、今回の分析の対象とはしないこととする。

4.2.2. 調査時期・方法・対象

調査は 2017 年 4 月 1 日のオリエンテーション時に実施した。調査対象は、スタートアップセミナーに参加した 2017 年度入学者 475 名であり、回答数は 457 件、欠損値を除いた有効回答数は 406 件であった。回答方法は、Web 回答システムを利用し、各自のスマートフォンを利用した上での回答を依頼した。また、「1. あてはまらない」から「5. 大変あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

4.2.3. データ処理

分析にあたり、否定型での質問となっていた設

問 8, 19, 21 の反転処理を行った。また、設問 7 から設問 16 は分析対象外としたが、セミナーの効果を明らかにするために「スタートアップセミナー満足度調査」の回答は分析に含めた。調整後のデータを利用して、SPSS (バージョン 25) で検定を行った。

4.2.4. 分析手順

2017 年度秋学期終了時点で既に退学している、または 30 単位以下の学生 63 名を抽出し「低単位群」とした。次に、成績の良好な学生群の上位 63 名を抽出し、「成績良好群」とした。2 章でも述べたが、1 年次の低単位者は、退学に至る確率が高かったことから、今回は、1 年次低単位者を「退学の予備軍」と読み替え、退学者の傾向分析に利用することとした。

一元配置分散分析でそれぞれの質問に対する 2 群間の回答平均値の差を検定することとした。高校時代に培った資質が 1 年次の成績にどのような差をもたらすか調査するため、1 年次秋学期末の成績を使用した。外国語学部における 1 年次では、授業形態も他学部生と比べると高校に近く、全員が必修の語学授業を受ける。また、留学などで行動範囲が広くなり、様々な外的要素が発生する 2 年次以上に比べ、1 年次は学習環境における条件を比較的統制しやすいことが、1 年次秋学期末成績を利用した理由である。大学生活は高校まででは経験したことのない新しい場面に出会うことが多くなり、外的要因のコントロールは難しく、調査としての限界はあるかもしれないが、学習環境が類似していれば、グループ間の差を測ることで、「成績良好群」にはみられて「低単位群」にはみられない資質を明らかにできるのではないかと考えた。

4.2.5. 分析結果

「成績良好群」と「低単位群」間において、分析対象とした全ての質問に対して、一元配置分散分析による解析を行った結果を表 2 に示す。Q3「セミナーで先輩学生からのメッセージは満足のいく内容だった」で $F(1, 121) = 4.547, p < .05$, Q19「成し遂げるのに数ヶ月以上かかるような目標に対して集中力を維持するのが難しい」で $F(1, 124) = 4.839, p < .05$, Q25「授業中黑板に書かれたことはきちんとノートにとった」で $F(1, 124) = 4.190, p < .05$, Q26「授業中、黑板に書かれていない内容でも大事なことはノートにとった」で $F(1, 124) = 10.320, p < .005$ と統計学的に有意な差が認められた。

表 2. 一元配置分散分析結果

Q3 【後半】先輩学生からのメッセージは満足のいく内容であった（成績良好群 $n=63$, 低単位群 $n=60$ ）

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	6.534	1	6.534	4.547*
グループ内	173.872	121	1.437	
合計	180.407	122		

Q19 （反転後）成し遂げるのに数ヶ月以上かかるような目標に対して集中力を維持するのが難しい（成績良好群 $n=63$, 低単位群 $n=63$ ）

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	5.786	1	5.786	4.839*
グループ内	148.254	124	1.196	
合計	154.04	125		

Q25 授業中黒板に書かれたことはきちんとノートにとった（成績良好群 $n=63$, 低単位群 $n=63$ ）

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	8.127	1	8.127	4.19*
グループ内	240.508	124	1.94	
合計	248.635	125		

Q26 授業中、黒板に書かれていないないようでも大事なことはノートにとった（成績良好群 $n=63$, 低単位群 $n=63$ ）

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	14.675	1	14.675	10.32**
グループ内	176.317	124	1.422	
合計	190.992	125		

** = $p < .005$, * = $p < .05$

4.3. 学習に関する調査の結果考察

検定結果に対して、修学支援の観点から解釈を行う。

4.3.1. 高校時代に獲得した忍耐力、困難を乗り越える力、継続力の影響

この質問群の 7 項目の内、有意な差が唯一確認できた Q19 は、長期間にわたって集中して継続した経験を問う設問である。二群の差から読み取れることは、低単位学生は、集中して物事に長期間取り組みやり遂げることが難しく、外国語学部の語学学習においても集中して学習を継続できていない可能性が考えられる。質問項目の参照元である Grit 尺度を使った米国の高校 2 年生対象の調査では、Grit スコアが高い生徒ほど中退率が低く、進学していることが報告されているが、Grit スコアが直接的に成績に影響することは言及されていない。その影響度合いは、今回の Q19 における有意差からは測ることができないが、大学での成績は入学前に培った継続力や忍耐力に影響を受けている可能性はあると言える。

4.3.2. 高校時代の学習習慣の影響

Q25 と Q26 は授業内での学習態度を示す項目

で、黒板に書かれていることも書かれていないことも学ぶべきことをノートに取れていない学生は、低単位者になることが読み取れる。外国語学部の語学クラス規模は約 25 名と高校に近いものであるが、高校時代までに授業での学習態度（はじめに聞く、主体的にノートを取る）が身に付いていない学生は、授業内容を十分に理解できないため、予習復習をこなせず、低単位に陥った可能性が示唆される。本学の授業 1 コマは 90 分間であり、高校の 1 コマの授業時間よりも長く、持続的な集中力が必要とされる。そもそも高校時代から授業内での学習態度が身に付いていない場合、大学での 1 コマの授業時間に耐えるのは容易でないであろう。そのような授業での態度、集中力等も大学初年次の成績に影響しているのではないかと考察した。

なお、前掲の小方（2008）でも、「高校 3 年次の学習習慣」は、「能動的な学習」に対してプラスに影響を及ぼすとし、さらに能動的な学習が「学問的知識」にも影響を及ぼすと述べられている。もちろん質問項目は異なるが、概ね本結果と整合的であると言える。また、垂門（2015）も先述の重回帰分析の報告で、高校時代の学習習慣が GPA に有意に影響を与えたとしており、外国語学部生は、学習習慣の成績への影響度が他の学部生に比べ強いと考えられる。

4.3.3. セミナーの影響

Q3 の先輩学生からのメッセージの満足度において有意な差が出た。先輩学生からのメッセージは大学生活や留学の体験についてのもので、メッセージから新入生に期待感を与える内容であったと考えられるが、メッセージから大学生活の明確なビジョンが描けなかった学生は、単位修得が順調ではなかったことが推測される。低単位群の満足度が相対的に低いと言うことは、「不本意入学で、自身の将来の進路であると受け入れられない」、あるいは不本意でなくても「明確な目標を持って入学していない」と言った新入生の状況も考えられる。

5. 課題と改善

今回外国語学部で行った、退学未然防止に向けた一連の取り組みから見えた課題について述べる。また併せて、退学に至る可能性が高い初年次での成績不振防止に向けた支援策の内容改善についても提起する。

5.1. 退学理由の分析

今回は、電子記録から退学理由の抽出を試みたが、あくまで電子記録は、事務的な担当者への引き継ぎを主目的としており、分析には限界があった。また、サンプル数が44名と少なく、電子記録から事情をよく読み取れない回答も多数存在したが、この点は分析対象を単年度でなく、複数年度に広げれば解決できるであろう。ただし、対象者が多くなれば統計的に処理しやすくなるが、電子記録にはマニュアルに基づいて入力された事務的な用語が多数存在し、退学理由に係るキーワードを抽出するには、より丁寧な分析処理を行う必要がある。退学理由に関しては、さらに深く分析する余地が残されており、今後の課題としたい。

5.2. スタートアップセミナー

セミナーは大学への期待感昂揚や友人づくりのきっかけづくりを目的に入学前の3月下旬に実施し、参加者の満足度は概ね高かった。しかし、実際に、効果の測定まではしておらず、また、内容についても検討の余地がある。新入生が一同に集まり、集中的に研修などを行える期間は非常に貴重であり、セミナーの有効活用は、初年次の成績不振防止に大きな影響を与えるであろう。そこで、今回の検定結果を踏まえた、セミナーの改善の可能性について述べておきたい。

まず、忍耐力や継続力については、語学学習にはあきらめず継続することが重要であるとの内容や実例を盛り込み、具体的な学習法のアドバイスまで踏み込めるよう改善していく。

次に、高校時代に黒板や黒板以外のノートを取るといった学習習慣に関しては、ノートの取り方や大学での講義スタイル、アクティブラーニング型の授業方法を説明するなど、大学での学習環境を学ぶプログラムを取り入れる。学習習慣は、一朝一夕で身に付けられるものではないが、授業開始までに少しでも学習習慣を身に付けられるよう、改善を図っていききたい。また、セミナーとは直接関係はないが、早期合格者に実施している入学前教育の内容改善、セミナーと入学前教育の連携も併せて考える必要があるだろう。

最後に、先輩からのメッセージは、新入生が大学への入学目的を確認し、4年間の計画を立てることを目的としているが、2017年に登壇した先輩学生1名は、短期海外実習や途上国でのボランティアの経験を語り、新入生の高い満足度を得られた。今後は、溝上(2018)がキャリア意識の重要性を述べているように、長期留学やインターシップ等の様々な経験した複数名に登壇してもら

うなど、講演内容の工夫により、新入生が大学生生活のビジョンを描けるように改善していきたい。

5.3. 学習に関する調査

5.3.1. 調査票の設問項目、回答方法

調査票の質問項目は、Grit Scaleを参考にはしているが、そのまま利用したわけではなく、外国語学部や新入学生であること、さらに調査実施時の場所や時間の制約などを考慮した上でカスタマイズして使用した。回答方法も5件法を利用したが、この場合4件法や6件法の利用も検討すべきであると考ええる。

また、今回は「B-2 学習習慣の欠如型」退学者に焦点を当てたため、質問項目策定にあたり、「B-1 対人スキルの欠如型」に関わるコミュニケーションのスキルや能力を測る設問を含めなかった。しかし、3.2.2. からわかるように、対人関係スキルが初年次の成績不振に影響を与えている可能性は大きいと、調査に含める必要があると考える。

5.3.2. 外的要因に関する課題

4.2.4. で述べた通り、1年次生は、留学等様々な外的要素が発生する2年次生以上に比べ、学習環境における条件を比較的統制しやすいが、それでも成績に与える外部環境要因の可能性を完全に否定することはできない。調査としての限界はあると考えられるが、初年次の成績に対して、外的要因が与える影響度も将来的には調査・分析し、明らかにしたい。

5.3.3. 統計分析の改善

今回は、一元配置分散分析を使用し、2017年度入学生の成績良好群と、低単位群の比較を行った。分析結果からは、外国語学部生のつまずきの特徴の一部を示せたものの、男女や学科など、さらなる詳細な分析が必要である。

なお、大学生の修学行動の調査にあたっては、大学での教育内容や学生の修学行動にも焦点を当て、分析することが必要であろう。実際、初年次の成績を目的変数とした場合、ある部分は高校時代の資質が影響し、ある部分は大学での学びの姿勢などが影響しているのではないかと推察する。外的変数が多く、調査の限界もあるが、条件を制約した上でそれらを少しずつ明らかにすることが、今後の退学未然防止だけでなく、効果的な修学支援などに繋がっていくであろう。今後は、高校時代からの資質にさらに注目すると共に、外国語学部の教育によって学生が身に付ける力にも焦点を当て、調査・分析を行っていききたい。

6. まとめとむすび

外国語学部生の退学を未然に防止することを目的に、外国語学部生のつまずきの傾向やその時期を明らかにした上で、具体的支援策の検討を行った。過去の退学者の傾向を分析したところ、外国語学部生は入学目的が明確で語学学習に対する意欲が高く、1年次の成績が良好であった場合は退学に至る確率が低い一方、1年次で低単位者となった場合は留年や退学に至る確率が高く、二極化する傾向があることがわかった。さらに、面談記録の頻出単語と原文から、退学者を「A 不本意入学型」「B-1 対人スキル欠如型」「B-2 学習習慣の欠如型」に分類し、それぞれに支援策を検討した。A と B-1 に対しては、人間関係づくりの手助けにより解決できる可能性がある（樋口 2013）との先行研究に基づき、スタートアップセミナーを実施し、概ね高い満足度が得られた。B-2 に対しては、学習習慣に係る調査を実施し、今後の支援策を検討することとした。低単位者 63 名と成績優秀者 63 名間でどのような要因が成績に差を生むかを確かめるため、設問への回答に有意差があるかを調べたところ、セミナーでの「先輩からのメッセージ」の満足度、「高校時代に獲得した忍耐力や継続力」、「高校時代の学習習慣」の質問項目の一部に有意差が示された。

昨今、高等教育機関における修学支援の重要性は年々増しているが、一方で支援する教職員の人的資源は限りがある。効果を意識した上で、留年や退学に至る学生数を減らす方法を検討する必要がある、そのためには学生の入学までに身に付けた資質や各大学や各学部の特色に沿った改善方法を見つけていくことが重要であると考え。この報告書が、日本の高等教育機関における退学者未然防止に少しでも役に立てば幸いである。

謝辞

本稿作成において、貴重なご意見をいただきました垂門伸幸氏、中原正樹氏、福原由衣氏に感謝申し上げます。今回の取り組みに協力いただいた外国語学部の教職員の皆様のご理解とご協力に感謝いたします。

注

1) 英語学科、ヨーロッパ言語学科、アジア言語学科、国際系学科の 4 学科のうち、英語学科・国際関係学科では英語を専攻語とし、英語以外の言語を副専攻語として学ぶ。

2) 例えば、アジア言語学科中国語専攻の場合、1 年次生の言語に関するコマ数は、中国語の修得を目指したクラスは 5 コマ以上、英語の習得を目指した科目は 4 コマあり、加えて専攻語の情報リテラシーを養う「情報」科目など、1 年次から徹底的に語学を学ぶカリキュラムとなっている。

3) 教学関係は、教学センターと呼ばれる部署で統括されている。「つなぎプロジェクト」と呼ばれる修学支援体制のもと、入学前から卒業に至るまで継続したきめ細かな修学支援が展開できるよう、教員・職員・保護者・大学・社会等が密接に連携し、支援していく取り組みを行っている。学生が、意欲的に修学に取り組み、将来のビジョンを描きながら、充実した大学生活を送られるようになることを目標としている。

4) 各年次の終了時点で在学していた者の値を求め、既に離籍していた年次分は計算に含めなかった。

5) (ア)、(イ) の単位区分は、全学部生のうち留年に至った学生の過去の単位修得実績を参考に設定した。ちなみに、1 年次の修得単位が (ア) の場合 70%、(イ) の場合 24% の確率で留年に至るとされている。

6) 当日は登壇の先輩学生以外にも、ファシリテーション研修を受けた「学生ファシリテータ」13 名も参加し、学生のグループワークの補助やアドバイスを行うことで、参加者の積極的な姿勢や発言を促した。

付録

付録 1. スタートアップセミナー満足度調査

Q	質問項目
1	【前半】大学での学び方について理解できた
2	【前半】京都産業大学の外国語学部で学ぶことに関して、期待感が昂揚した
3	【後半】先輩学生からのメッセージは満足のいく内容であった
4	【後半】グループワークは満足のいく内容であった
5	【後半】グループワークを通して 4 年間の目標設定や入学目的の再認識ができた
6	【全体】全体を通してスタートアップセミナーに参加してよかった

付録2. 学習に関する調査

Q	質問項目
7	語学（英語・その他言語を含む）が好きだ
8	語学の学習に関して不安がある
9	英語学習の重要性をよく認識している（英語学科は回答不要）
10	専攻語とともに英語もしっかり勉強したいと思っている（英語学科は回答不要）
11	京都産業大学外国語学部で学ぶことが楽しんだ
12	自分の意志で大学や学科・専攻を選んだ
13	本学は第何志望でしたか
14	入学する専攻は第何志望でしたか
15	短期留学（3週間）をしたい
16	長期の留学（半年～1年）をしたい
17	大きな挑戦を成し遂げるために、挫折を乗り越えたことがある
18	挫折があっても、やる気を失わない
19	成し遂げるのに数ヶ月以上かかるような目標に対して集中力を維持するのが難しい
20	始めたことは何であれ、最後までやりとげる
21	成し遂げるのに数年かかる目標を達成したことがある
22	新しいことに興味がうつる
23	毎日コツコツと勉強ができる
24	授業についていけるようにできるだけ予習をした
25	授業中、黒板に書かれたことはきちんとノートにとった
26	授業中黒板に書かれていない内容でも大事なことはノートにとった
27	授業の内容でわからないところは先生に質問や相談に行った
28	授業で出された宿題や課題はきちんとやった
29	授業で習った内容を理解するために復習をした
30	自宅では自分なりに計画や目標をたてて勉強した

参考文献

Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92: pp.1087-1101

樋口健（2013）大学生調査にみる高大接続の諸相 第3回【ベネッセ研究員より】大学1年生の転学・退学の意向とその処方. ベネッセ教育研究所 <https://berd.benesse.jp/berd/focus/4koudai/activity3/> (参照 2018.11.05)

伊藤宏隆, 伊藤圭佑, 舟橋健司, 山本大介, 齋藤彰一, 松尾啓志, 内匠逸 (2014) 学生の修学データを用いた要注意学生の傾向分析. 研究報告教育学習支援情報システム 13 (8): pp. 1-8

神林博史 (2014) 本学における不本意入学者の特徴: 東北学院大学新入生意識調査の分析. 東北学院大学教育研究所報告集 14: pp. 15-25

溝上慎一 (2018) 大学生白書 2018 -いまの大学教育では学生を変えられない-. 東信堂, 東京

溝上慎一, 京都大学高等教育研究開発推進センター, 河合塾 (2015) どんな高校生が大学, 社会で成長するのか-「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ-. 学事出版, 東京

中本陵介, 垂門伸幸 (2015) 面談を通して把握した低単位学生の特徴と学業関連領域における支援策実践例: ピア・サポーターを活用した修学支援. 高等教育フォーラム 5: pp.146-157

日本経済新聞 (2018) 大学の留年・中退率公開義務化を中教審WG. 日本経済新聞 2018年9月18日付朝刊: p.36

日本高等教育学会第18回大会実行委員会 (2015) 自由研究発表 I I-1 部会 不適応学生. 日本高等教育学会第18回大会発表要旨集録: pp. 28-37

西川一二, 奥上紫緒里, 雨宮俊彦 (2015) 日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度の作成. 日本パーソナリティ心理学会 24 (2): pp. 167-169

小方直幸 (2008) 学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム. 高等教育研究 11: pp.45-63

大河内佳浩, 山中明生 (2016) プレースメントテストや高校の履修状況などのデータを用いた初年次成績不振者の早期発見. 日本教育工学会論文誌 40 (1): pp. 45-55

清水一 (2013) 大学の偏差値と退学率・就職率に関する予備的分析: 社会科学系学部のケース. 大学経大論集 64 (1): pp.57-70

高岡祥子, 中井あづみ, 杉山恵理子, 野末武義, 清水良三 (2017) 学生の修学データを活用した多角的な学生支援の提案: 要注意学生の早期発見と学生相談との協働. 明治学院大学心理学紀要 27: pp.81-93

垂門伸幸 (2015) 修学支援に活用する指標の検討とその活用方法: 出席率とGPAの関係に注目して. 高等教育フォーラム 5: pp.137-145

The Analysis of the Dropout Tendency and Report on Support Measures at the Faculty of Foreign Studies in Kyoto Sangyo University

Ryosuke NAKAMOTO¹, Nobuko SAKURAI²

The faculty of foreign studies at Kyoto Sangyo University introduced a series of support measures in order to reduce the rate of dropouts from university. First, the first author analyzed the data of dropouts and tried to find tendencies and timing. As a result, it was clear that students with a low academic performance in the first year had a high dropout rate.

Secondly, we classified those dropouts based on their reasons such as, type A: “Reluctant enrollments”, Type B- 1 “lack of interpersonal skills,” Type B - 2 “lack of study habits.”

Finally, we conducted practical measures. For A and B-1, we designed a start-up seminar with the purpose of raising their expectations of our university and helping them make friends. For B-2, we conducted a questionnaire about the learning experiences, which freshmen acquired in their high school days. The outcome of the measures and analysis of the results of the survey suggested that it is important to understand the characteristics of students in each faculty as well as to assess the learning habits they formed in their previous education.

KEYWORDS: students of faculty of foreign studies, dropouts, reluctant enrollments, questionnaire, learning habits

2019年2月27日受理

1 Faculty of Foreign Studies Administration Office and Center for Academic Affairs, Kyoto Sangyo University

2 Faculty of Foreign Studies, Kyoto Sangyo University

